

クリスマスになると、どこの教会学校でも降誕劇を行います。そこに羊飼いたちと登場して来るのが東方の占星術の学者たちです。昔から占星術の学者と言えば、決まって「3人」と考えられていたようです。多分、マタイ2章11節のところ、主イエスに「黄金、乳香、没薬」という3種類の貴重な贈り物をこの学者たちが献げたことから、いつの間にか3人と考えられるようになってしまったに違いありません。中世になると、この学者たちはカスパール、メルヒオール、バルタザールという名前まで持ち、それぞれが老年、壮年、青年という三世代とヨーロッパ、アジア、アフリカの三大陸を代表する王様にまで仕立てあげられてしまいました。

宗教改革者のジャン・カルヴァンは、このことについて「神の真理を偽りに替え」（ローマ1章25節）ることだと断じております。それにしても聖書の神を拝する者ではなく、考えられる限り神の救いから最も遠くに位置する「偶像崇拜者」の人々が、最初に御子イエスを礼拝しに来たことは真に驚嘆すべきことです。そこに独り子を与えてくださった神の愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」（エフェソ3章18節）が如何に大いなるものであるかがすでに示されていると言えるでしょう。

しかしここで留意したいことは福音書記者マタイが、私たちにこの学者たちのように「占星術によって生きよ」とは一言も勧めてはいないということです。むしろ学者たちが、自分たちの知識や経験をもってしても、遂にイエスのもとに至ることはできなかったという単純な事実を告げ知らせてます。なぜなら彼らには「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で/決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである」との預言者ミカの告げた約束の御言葉が与えられてはいなかったからです。つまり、まことの救い主のお生まれになった場所に学者たちが至るためには、やはり「わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」（詩編119編105節）としての御言葉がなければならなかったのです。

この学者たちは、占星術の支配する世界に住み、そこで事実、星や月を神々とする祭司の生活をしていながら、どうしてベツレヘムへの旅に赴いたのでしょうか。はっきりしたことは分かりませんが、多分占星術の学者としての生活に、なお満たされぬ思いを抱いていたからではないでしょうか。占星術の世界に生きながら、既に占星術の世界に生きえなくなっていたとも言えるでしょう。神々の地に住み、まことの神を見失っているその悲しみの中で、まことの救い主を求めずにはいられなかったのです。その限り、彼らもまた、喜びを失っていました。だからこそ、御子イエスのみ前にひれ伏し拝した時、大きな喜びに溢れたのです。

彼らがいままで占い続け、拝し続けた神々は、遠く遙く天空に青く赤く瞬く星辰でした。それが彼らの神々でした。しかし、彼らがベツレヘムで見いだしたお方は、ルカによれば、家畜小屋の飼葉桶に横たえられた人となり給う神でした。ひときわ低く貧しい赤子の誕生の場でしかなかったのです。彼らはこの事実につまずいたのでしょうか。彼らはその事実を目の当たりにして落胆したのでしょうか。「なんだ、これがユダヤ人の王か、これがまことの救い主か。我々がこれまで仕えてきた神々となんと異なることだろう」と。いいえ、そんなことはありませんでした。彼らは、ただ非常に大きな喜びをもって喜んだのです。そして、ひれ伏し、拝し、惜しげもなく自分が持っている最も善きものを、この最初の礼拝の場において献げきったのです。学者たちはどうして、この救い主の低さと弱さと貧しさにつまずかなかったのでしょうか。そこにこそ人間の一切の悲慘を身に引き受けつつ、決定的に私たちと共にいるために人となってくださった愛の神を見いだしたからにちがいありません。

私たちは、彼らの旅立ちに信仰の父アブラハムの旅立ちを重ね合わせてみる事ができるでしょう。確かに彼らにはユダヤの地に向かう旅の決意を呼び起こしたのは星でした。しかし、このメシアの星に光を与え、学者たちの占星術の知識に働きかけ、ついに御言葉を示し、まことの救い主のおられるところ、ベツレヘムへと導かれたのは主なる神ご自身だったのです。